



第36回岩手大学 COEフォーラム

2004年度から採択された岩手大学21世紀COEプログラム「熱-生命システム関連学拠点創成」では、関連分野において国内外で活発に研究をされている方をお招きし、月1回のペースでセミナーを開催しております。今回は三菱化学生命科学研究所の近藤 宣昭氏に講演をお願いしました。

お忙しいとは思いますが、万障繰り合わせの上、ぜひご参加いただきますようお願い申し上げます。

第36回担当・農学部

鈴木 幸一 (koichi@iwate-u.ac.jp)

日時：2006年10月27日(金) 17:00～18:30
場所：農学部2号会議室(2号館1階会議室)

近藤宣昭 氏
三菱化学生命科学研究所

年周性に冬眠を制御する分子シグナル “冬眠特異的蛋白質(HP)複合体”

哺乳類の冬眠は年周期で発現し、冬季の数ヶ月間数 月の致死的な低体温を生き抜く不思議な適応現象として知られている。最近までの研究から、冬眠期間中は低温のみならず細菌や発ガン物質、脳虚血などにも強い耐性を示すとの報告がなされ、冬眠にはあらゆる有害要因から生体を保護する機構が関与するとの推測がされてきた。このような機構の理解は、生体のエネルギー制御や病気の予防や治療、さらにはヒトへの適用を目指した人工冬眠の研究などに画期的な領域を拓くと期待され、冬眠を制御する物質、いわゆる冬眠物質、が一世紀近くにわたって探索されてきた。今回、我々の研究から冬眠を制御するホルモン候補が初めて発見されたので、この発端となった20年前の心臓の低温保存研究を振り返りながら、冬眠を分子システムとして構築する試みを紹介し、その意義について述べてみたい。

近藤先生のこれまでの長年の研究成果は、Science, Cell, JBCなどで発表されています